

## 八条院町－京都駅駅舎改築に伴う発掘調査－現地説明会資料

1994年10月23日

(財)京都市埋蔵文化財研究所

<調査期間> 1993年6月～1995年2月(予定)

<調査面積> 約4000㎡(総合)

### 1、調査地の歴史的環境

京都駅駅舎は平安京左京八条三坊六町・十一町・十四町の広い範囲にまたがっていますが、現在において発掘調査を進めている地点は第7次調査区で、平安京左京八条三坊六町から室町小路を挟んで十一町の一部にあたります。ここは、中世京都において八条院町と称される地域です。

平安時代末期に鳥羽法皇の寵愛を受けました皇女暲子内親王(八条女院)は、生母美福門院から膨大な荘園とともに八条東洞院邸を伝領し、強力な経済的基盤を得ます。八条院町の成立は、この八条院御所の家政機関が周辺に形成されたのに端を発します。これら八条院町の所領は、正和2年(1313)12月に当時伝領されていた後宇多法皇から東寺に「院町十三箇所」として施入されます。この時の『八条女院院町在所目安注文』によれば、女院御所(十三町)・女院御倉(十四町)・女院庁(十一町)などが女院跡地として記されています。六町の室町小路に面した地域、「七戸主余」としてこの「院町十三箇所」に含まれますが、この地域は建仁2年(1202)の『八条院庁下文案』によれば「八条院御倉」として二条局に賜わっており、平安時代末期から鎌倉時代初頭には八条院御所を支える御倉として機能していたことがわかります。

また、東寺に施入された6年後の元応元年(1319)6月の『八条院町年貢帳』では、八条院町を構成する請人が詳細に登録されています。この中には、地子を徴収されるものとして農民の他に番匠・薄屋・丹屋・金屋・完屋・塗師などの手工業者がみられます。八条院町から徴収された地子は東寺の仏事費用にあてられましたが、その徴収は容易ではなく、院町という領域的結束のもとに中世的「町」が形成され、領主的支配に抵抗を示しました。古代的な貴族宅地が解体していく過程において、御倉などに所属していた手工業者なども中世的「町」の町人として変質発展していった様子を推測することができます。

このように「町」として展開した八条院町も、15世紀の終りには「院町庄」として農村化していったようで、豊臣秀吉による御土居の造営によって東寺領としての「院町庄」は消滅します。江戸時代初頭の『洛中洛外図屏風』には八条院町の地域が畠として記されています。すぐ南には御土居が存在するため生活空間としての利用はなさ

れず、それ以降畠地として近代まで利用され、近代にはいり京都駅の建設を迎えることになるのです。

## 2、これまでの発掘調査の概要

これまで、6次にわたって調査を行ってきましたが、それらの成果を八条院町に関係する中世の遺構を中心にここで簡単に概観してみます。なお、第4次調査に関しては、調査地が京都駅の東端に位置し他の調査区から離れているため、参考資料として別に調査成果をまとめておきました。

### 第1次調査（約250㎡）

検出した主要な遺構は、鎌倉時代から室町時代にかけての井戸群と、調査区でL字に屈曲する室町時代の堀や建物小礎石群です。このうち、常滑の大甕を天地逆に据えた井戸は構造的に稀有なものです。遺物としては、仏器の鑄型片や埴塼が整地層から多く出土しており、井戸などから漆が付着した甕片や漆塗の骨角製品が出土していることから、中世において銅細工や塗師などが周辺で活動していたことが推測できました。

### 第2次調査（370㎡）

調査区東半で鎌倉時代の方形縦板組井戸を集中して6基検出しました。調査区のすぐ東には室町小路が想定され、小路に面した地域が井戸を必要とする生活空間であったことが推測できました。井戸群の西には南北柵列が2条宅地を区切るように走り、柵列に挟まれた幅約12mの部分には多くの柱穴とともに竪穴状遺構が4基検出できました。いずれも南北を長軸とする長方形の平面プランをしており、北辺中央と南辺中央に柱穴を持っています。最大のものは長辺（南北）2.5m、短辺（東西）1.5mで、床面からは鏡の鑄型やフイゴ羽口、埴塼片などが集中して出土しました。おそらく、鑄物工房に関わる簡易な構造の小屋でしょう。これらの調査成果から、室町小路に面した地域を生活空間として利用し、奥まった部分に工房を持つ八条院町の様相が部分的ですが明らかになってきました。

### 第3次調査（600㎡）

室町時代と推定できる遺構は、建物小礎石や西端では礎を敷き詰めた建物地業を検出しました。この建物地業は、第1次調査で検出した堀で南と西を限られています。同様な建物地業は、現在行われています駐車場建設予定地の発掘調査でも検出されており、蔵と想定できそうです。鎌倉時代の遺構面では、第2次調査で確認しました西側の南北柵列の続きを検出しています。この東には工房に関わる竪穴状遺構が想定できますが、当調査では検出できず多数の掘立柱を検出したにとどまりました。また、調査区南で井戸状土塼が等間隔で東西に並んでいる状況が確認でき、柵列などで町の

中心地域が細分されている様子がみてとれます。

#### 第5次調査（880㎡）

調査区中央で室町小路の路面および築地の検出が予測されていましたが、その推定ライン通りに室町小路路面が検出できました。小路に面した宅地部分では多数の柱穴が確認できており、礎石も良好に遺存しています。室町時代には路面際まで柱穴が迫っていました。井戸は路面から奥まった位置に多く検出できており、建物の奥に炊事空間が推定できます。絵画資料から復原されている中世町屋の様相が良好な形で検出できたといえます。また、周辺からは鑄造関係の遺物が出土しており、多くの炉状遺構も検出していることから、宅地内工房としての性格も推定できます。とくに室町小路の東、十一町では、<sup>ろしよ</sup>炉床と考えられる遺構に、溶解炉壁とともに銅鑿<sup>はい</sup>の鑄型が再利用されており、仏具の製造が当地で行われていたことを示唆しています。

#### 第6次調査（160㎡）

第2次調査区と第7次調査をつなげるために行った小規模な調査です。井戸群や南北柵列など、第2次調査で検出した遺構群がひきつづいて検出できました。

このほか中世以外の遺構について簡単に述べておきましょう。全調査区を通じて江戸時代に関わる遺構はほとんど検出していません。南北方向の耕作畦<sup>あぜ</sup>をとるところで確認しているくらいです。また、第5次調査区では南北に並ぶ肥だめを検出しており、畠として利用されていた状況を裏付けています。平安時代の遺構もほとんど確認できず、9世紀から11世紀にかけて堆積した湿地状遺構を検出したにとどまります。もともと流路だったものが平安時代に湿地となったものと考えられます。人々の生活に関わる井戸跡などがまったく発見できないことから、平安時代もはじめのうちは生活空間として利用されなかった可能性があります。このような平安時代の流路は近辺における過去の調査でも確認されており、この地域に人々が多く居住し活気あふれる状況を呈したのは平安時代も終り頃であったことが発掘調査成果からもうかがえます。

### 3、第7次調査の概要

調査面積は、約1200㎡です。現在、検出している遺構面は室町時代（14世紀）のものです。

**室町小路** 調査区東端で検出しています。路面上には堅くジャリが敷き詰められており、敷設にともなって部分的にやや大きな石を南北に並べている様子が認められます。両側溝は幅0.4mほどの狭く浅い溝で、道路の側溝というよりは路面際に展開する建物の雨落ち処理の溝のようです。

**建物** 室町小路西側溝に並行して建物小礎石が並んでいます。これらの小礎石は東西方向にもよく並び、町屋を形成していたようです。

井戸 残りはあまりよくありませんが、井戸が多く検出されています。全調査区を概観して特徴的なのは、室町小路西側溝から約15mほど西にはいったところに多くの井戸が南北に並んでいることです。室町小路に面した町屋建物の奥に井戸を要した空間があったようです。

鑄造遺構 井戸群のさらに西側には方形土壇が検出でき、中には炭や焼土とともに鑄型・坩堝・フイゴ羽口の破片が多く出土する土壇がみられます。鑄造に関わる遺構と考えられます。

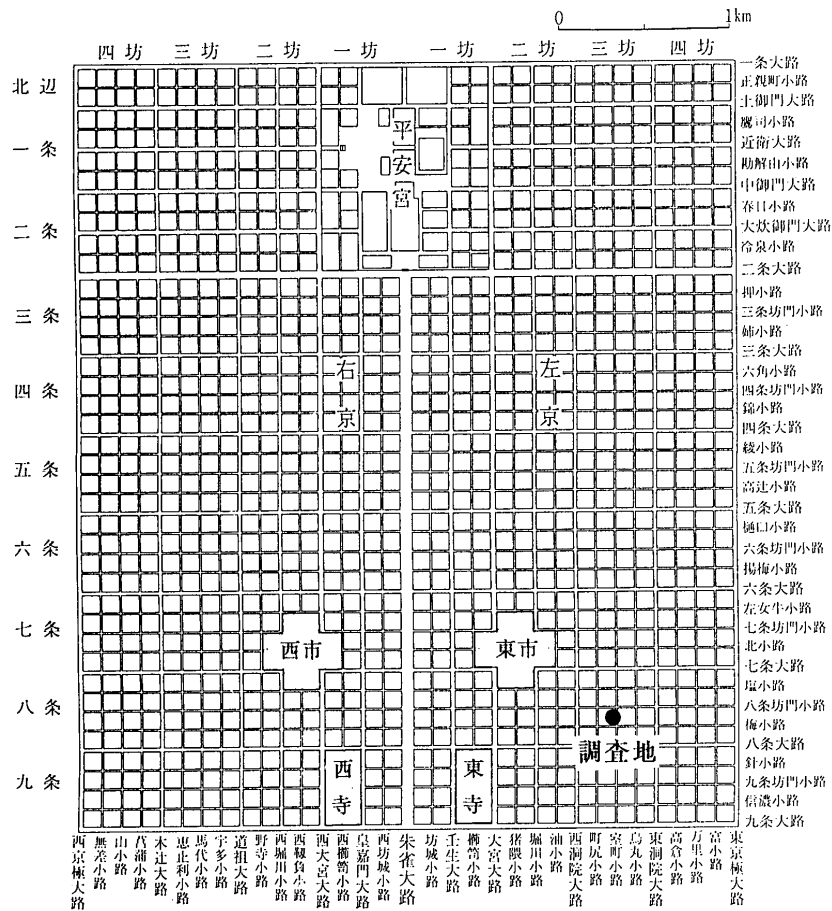
通路 調査区北端で町屋建物の柱穴が途切れる部分があり、この面に細かいジャリが敷かれています。室町小路から西へのびて町の中心部に通じる路地と推定できます。この東西通路は六町のほぼ中心を東西に位置します。また、第5次調査区の南端でも町屋建物が途切れる東西柵列を検出しており、この柵列と今回検出した通路の距離が30m余りであることは興味深い事実です。

#### 4、出土遺物

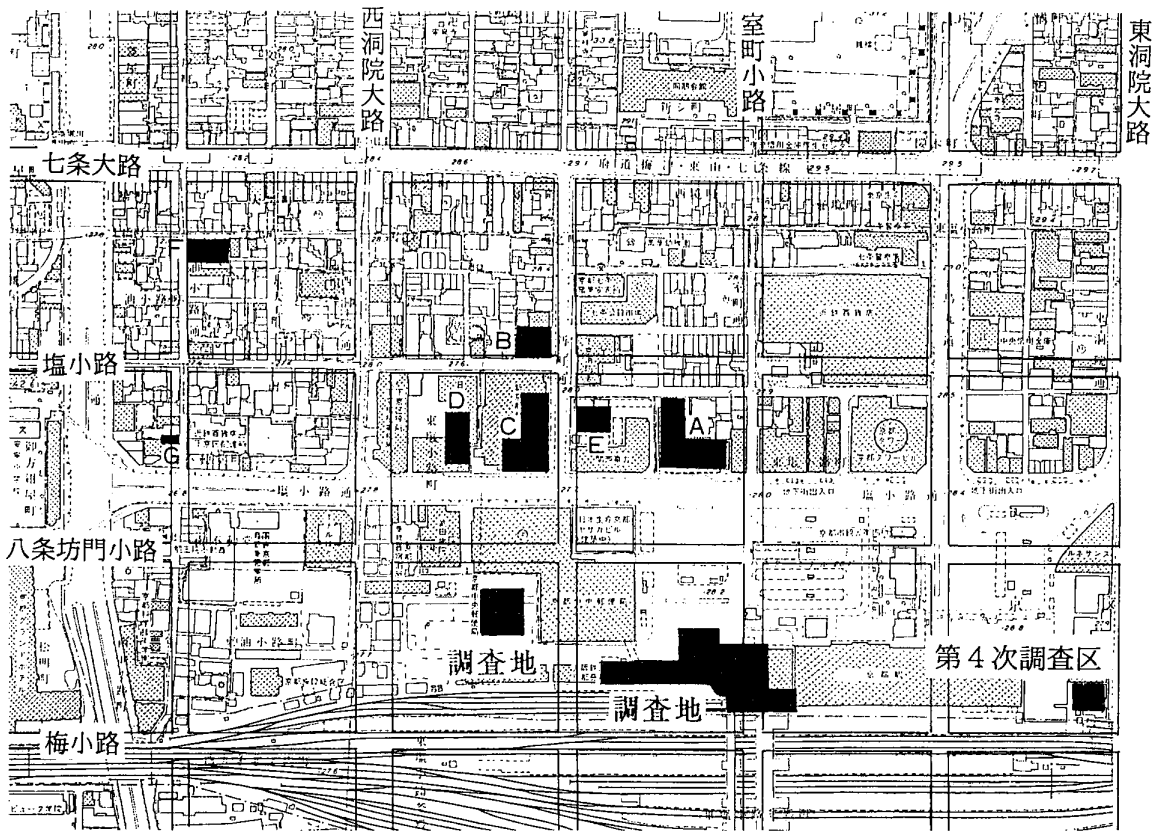
第7次調査までに出土した遺物は土器類を中心に多く出土しています。中でも銅製品の鑄造に関わる遺物がめだっており、この六町で銅細工が行われたことを如実に物語っています。鑄型の種類を概観してみると、第1次調査区では六器・鉦・華瓶などの仏事に関わる製品の鑄型が多く、第2次調査区から第7次調査区では鏡の鑄型が多くみられます。また、十一町では、銅磬の鑄型が炉床に再利用されていました。これらのことから六町の西寄りでは仏器を、六町の室町小路面から十一町では鏡を中心に銅細工が生産されていたことが推測できます。ちなみに、当調査地の北方にあたる左京八条三坊二町・七町の調査では刀装具の鑄型が多く出土しており、同じ銅細工でも地点によって生産されたものが異なっていた様子がよくわかります。

#### 5、まとめ

今回の発掘調査では、総計4000㎡にもわたる広い範囲で発掘調査を実施し、中世八条院町に関わる遺構を良好に検出しました。中世町屋構造や銅細工などの生活を理解する大きな成果を得ることができました。今後、これらの調査成果をもとに中世の八条院町の詳細な姿を明らかにしていきたいと思えます。

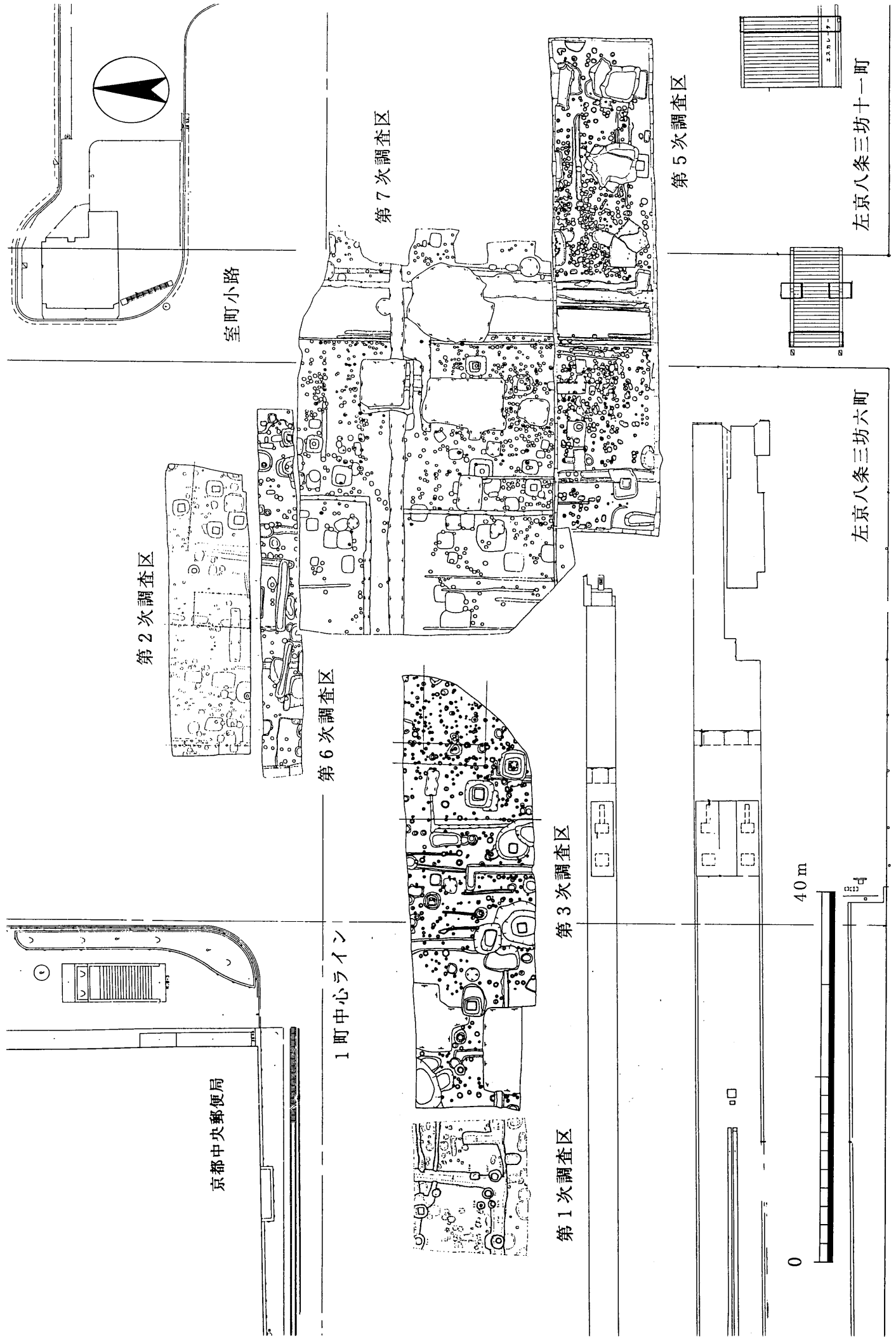


平安京条坊における発掘調査地点



- A: 鍛造工房の一部を検出
- B: 中世の建物や井戸を検出
- C: 刀装具の銚型が出土
- D: 井戸や埋襲などを検出
- E: 埋納銭が出土
- F: 中世の鍛冶関連遺構を検出
- G: 中世の鍛冶関連遺構を検出

調査地周辺図 (1:5000)



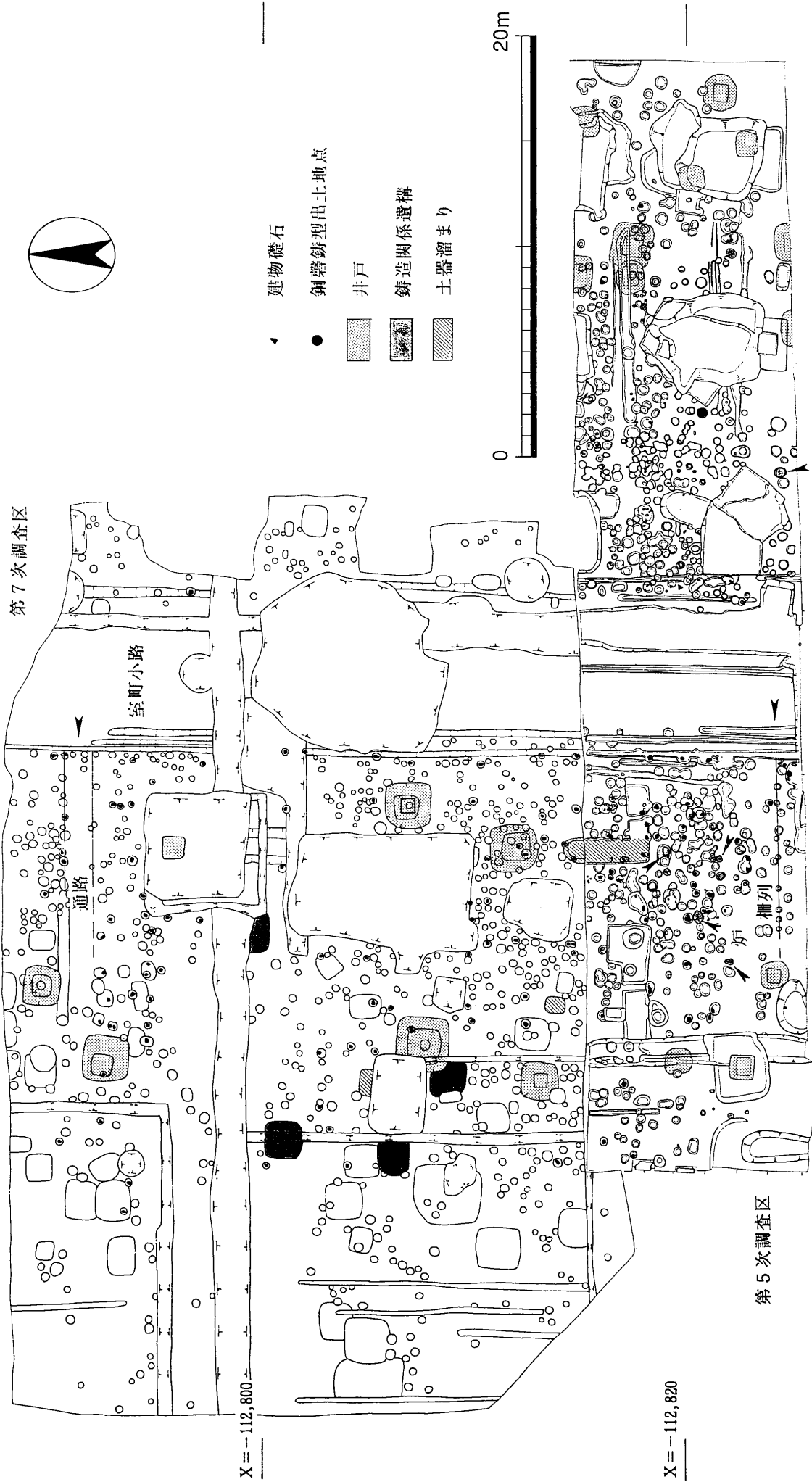
平安京左京八条三坊六町調査区配置図 (1:400)

梅小路

Y = -21,840

Y = -21,820

Y = -21,800

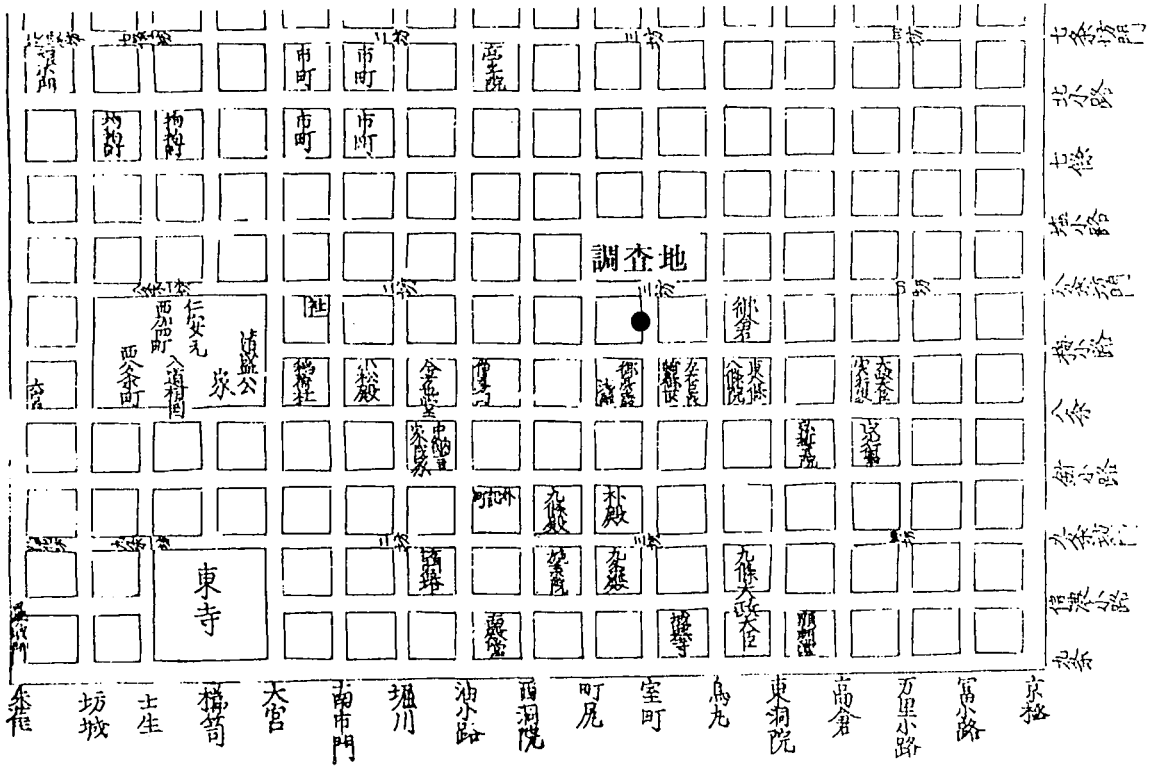


X = -112,800

X = -112,820

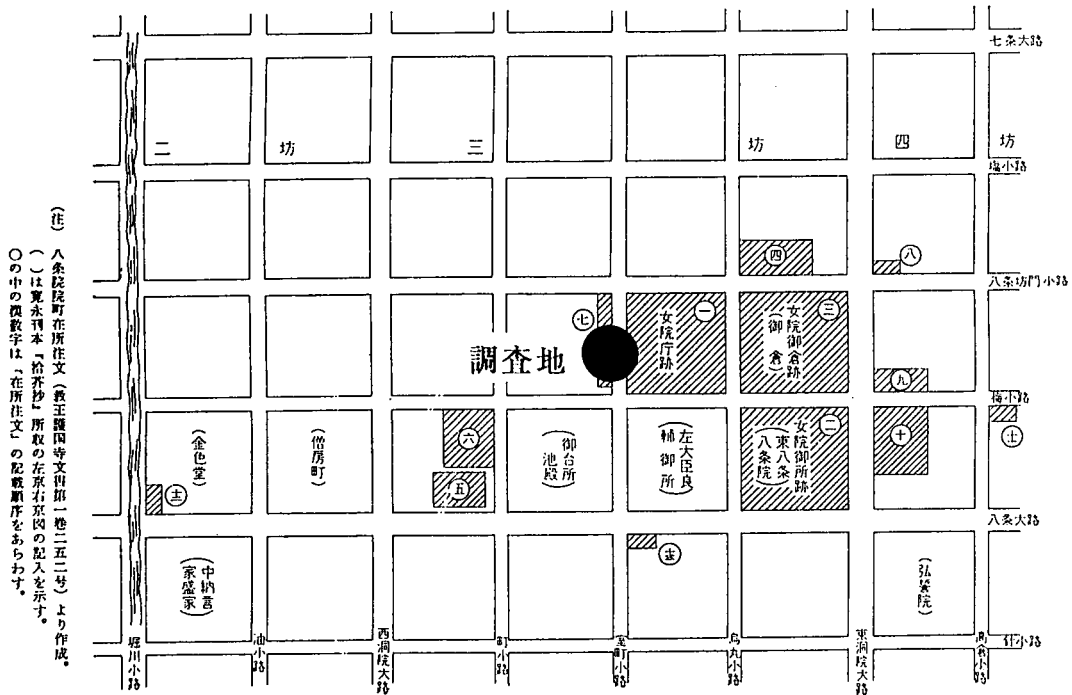
- 建物礎石
- 銅礬鋳型出土地点
- 井戸
- 鋳造関係遺構
- 土器溜まり

第5次調査区及び第7次調査区遺構図 (1:200)  
 (この図面は略図より作成したものです。転載は御遠慮ください。)



「拾芥抄」京程図にみる八条院付近

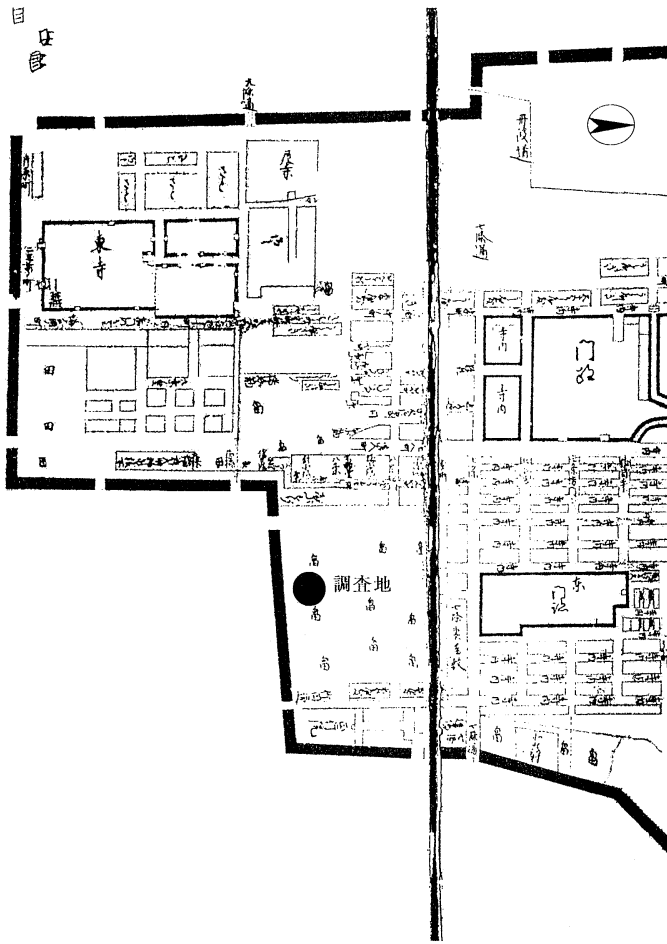
(「平安京左京八條三坊二町」 (財) 古代学協会 1983年)



正和2年(1313)12月東寺施入時の八条院町

(仲村研「八条院町の成立と展開」『京都「町」の研究』 1975年)

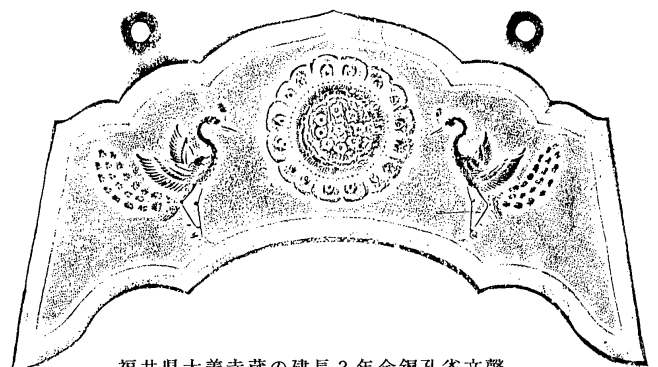




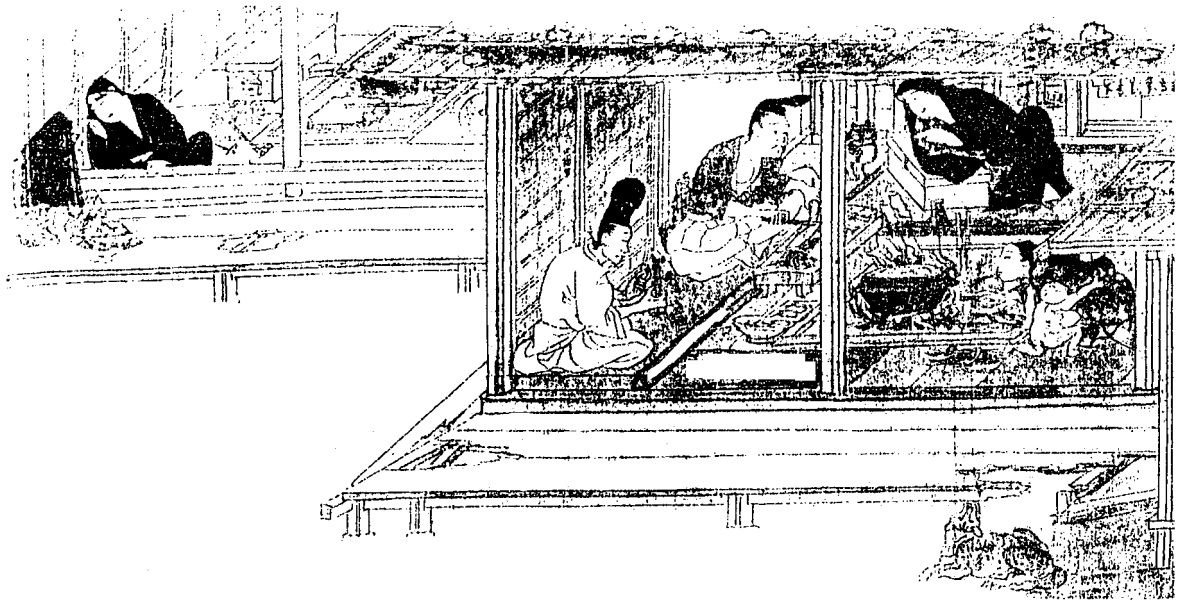
洛中洛外地図屏風にみる江戸時代初期の調査地付近  
 (『図集日本都市史』 (財)東京大学出版会 1993年)



左京八条三坊十一町 (5次調査) 出土の銅磬鑄型拓影 (1:2)

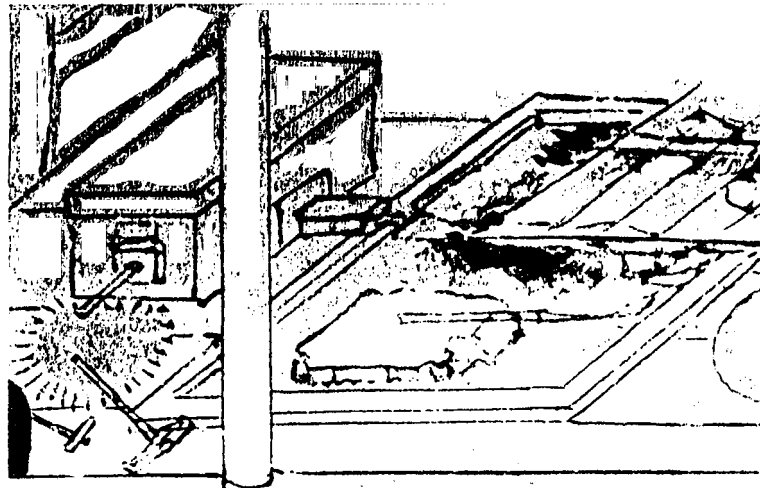


福井県大善寺蔵の建長3年金銅孔雀文磬  
 (広瀬都巽『日本銅磬の研究』 1943年)



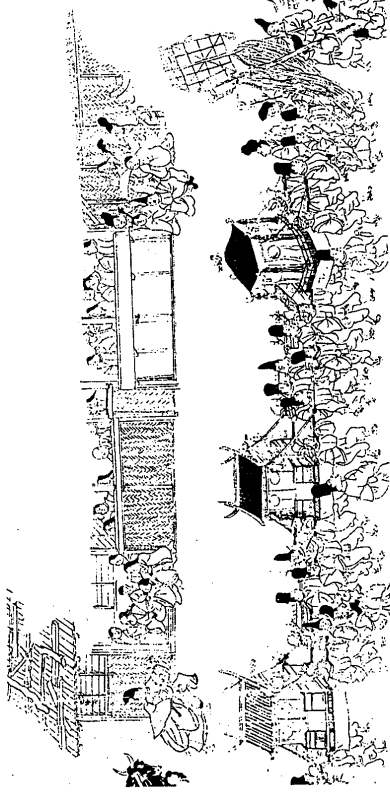
120 銅細工の仕事場と居間 14世紀初めの情景・京の西七条に住むとても貧しい銅細工の仕事場と居間。仕事場は居間に隣りあって離れのようにになっている。仕事場は二間四方（四坪）、居間は二間に二間半（五坪）の広さであろう。仕事場には火造場があり、居間には炉がある。濡れ縁はこわれている。絵にみるかぎりの家族は夫婦と娘三人と手伝い二人の七人と猫一匹である。松崎天神縁起 防府天満宮

121 銅細工の仕事場(二) 四坪ばかりの広さ。左隅に箱フイゴがあり、その火口から火造場が一坪たらずあり、手前にカナトコがあり、その上に火かき棒(?)が置かれている。フイゴの手前には敷皮があり、そこに座ってフイゴを操作する。しばらく仕事をしていないようで、荒れている。松崎天神縁起 防府天満宮

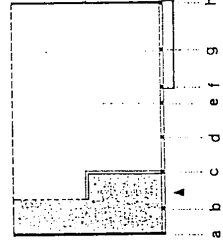


### 絵巻物にみる銅細工

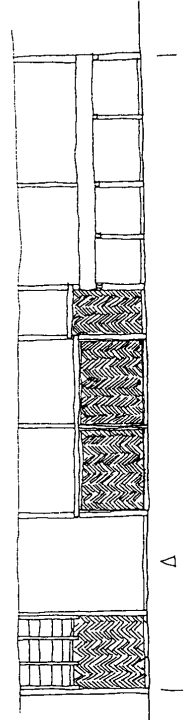
(遠藤元男『ヴィジュアル史料日本職人史Ⅰ 職人の誕生』 1991年)



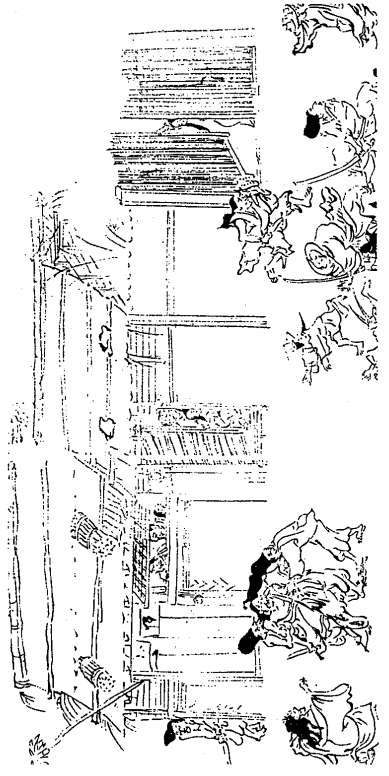
(B2) 卷12、41~44紙



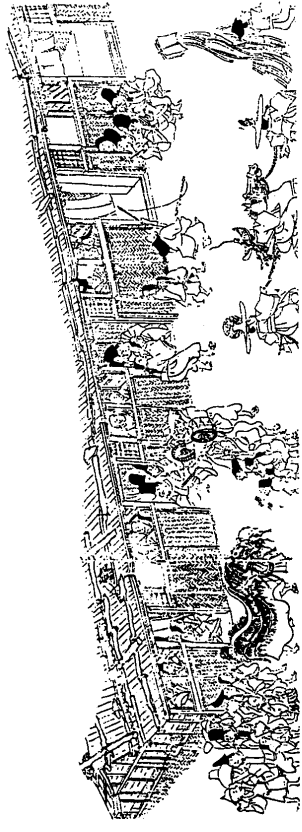
B2



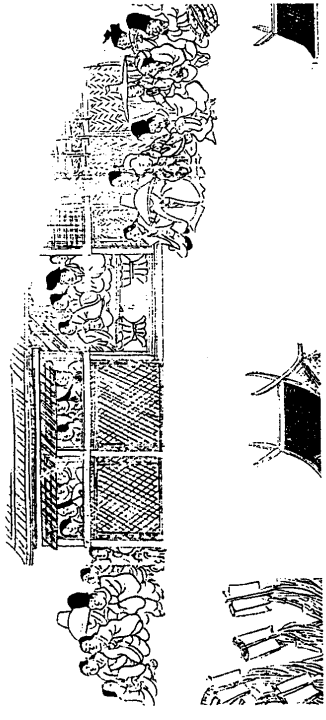
B2



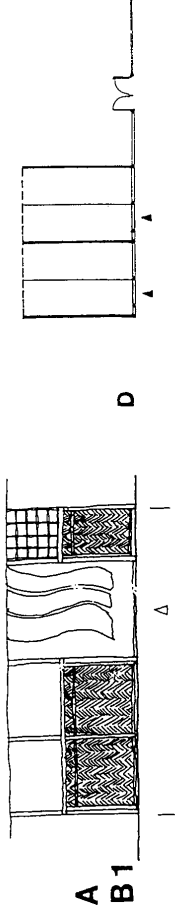
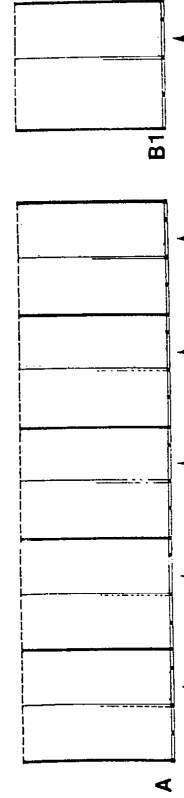
(D) 卷13、7~9紙



(A) 卷12、28~30紙



(B1) 卷12、39~41紙



『年中行事絵巻』にみる町屋  
(野口徹『中世京都の町屋』 1988年)

## 第4次調査(440㎡)

### 1、発掘調査の概要

東洞院通の西に接する調査区で、平安京の左京八条三坊十四町に推定され、他の調査区(第1～3次・5～7次)から約200m東に位置する。第4次調査では、平安時代後期・鎌倉時代・室町時代と各時代の良好な遺構を多数検出できた。

#### 平安時代後期～鎌倉時代前期の遺構

溝、井戸、土塋、掘立柱建物、柱穴、整地層などを検出した。平安時代後期以前は調査地点は低湿地で、この湿地帯を平安時代後期に、「L」字状の溝を南部から東部にかけて掘り、東部はさらに20cm程の整地をして安定させ、宅地として利用している。

掘立柱建物は東西7m、南北3m前後の規模で、柱穴には礎石が据えてある。井戸は3基検出した。内1基には井戸枠の木材痕跡が残るが、他は構造が不明である。その他土塋、柱穴などがある。

#### 鎌倉時代後期から室町時代前期

溝、井戸、ゴミ穴、土器廃棄土塋、竪穴状遺構、土塋、柱穴、路面などを検出した。溝は東西方向で断面が箱型になるものと、南北方向で幅の狭いものがある。南北方向の溝の西部には小石を敷き詰めた遺構があり、道路の痕跡と考えられる。

ゴミ穴、土塋は調査区内で普遍的に検出したが、東北部に集中する。ゴミ穴の径は1m前後で円形のもの、長径2m前後の楕円形のものがあり、共に深さは0.3～0.5m前後で、箸、土器、草履状木製品などが多数出土した。土器廃棄土塋は径1m前後で、室町時代前期の土師器の破片が多量に土塋内から出土した。竪穴状遺構は南北方向3.5mで深さは0.15m、底は平坦で柱穴を2基検出した。井戸は北部で検出した。構造は、石組みであるが、組み方は簡易な積み方をしている。

### 2、出土遺物

遺物では、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦など瓦の出土が多い。年代は平安時代後期に属し、八条院に関連した建物に葺かれていたと考えられる。

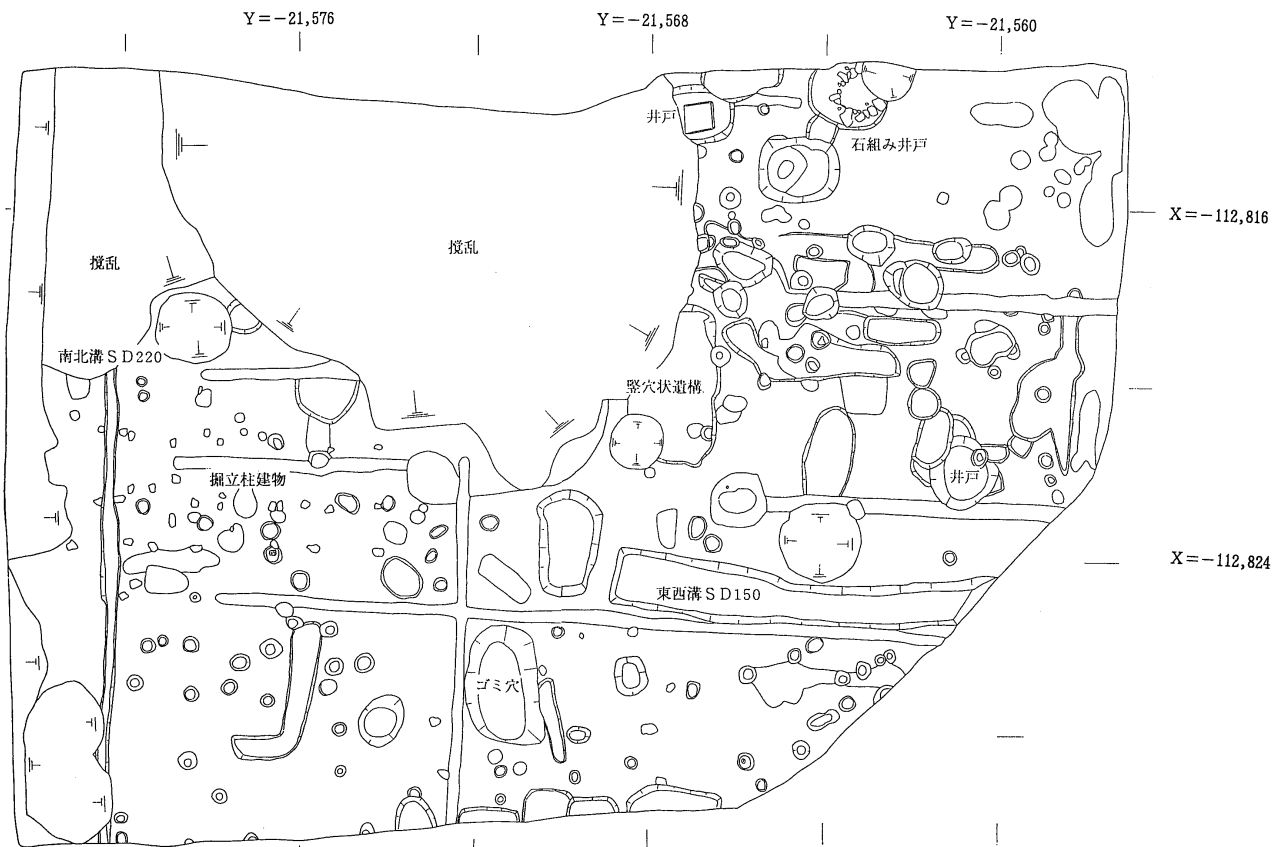
陶磁器では、中国製の緑釉陶器枕が出土し、白磁水注の出土も多い。木製品では草履状木製品の出土が多い。長辺24cm、短辺15cm前後で、両脇に切込があり、先端には穴が開く。保存状態の良好なものには、藁状の表の痕跡が残る。その他、全長30cmの船の模型がある。近世の三十石船に似た形態をしている。

### 3、まとめ

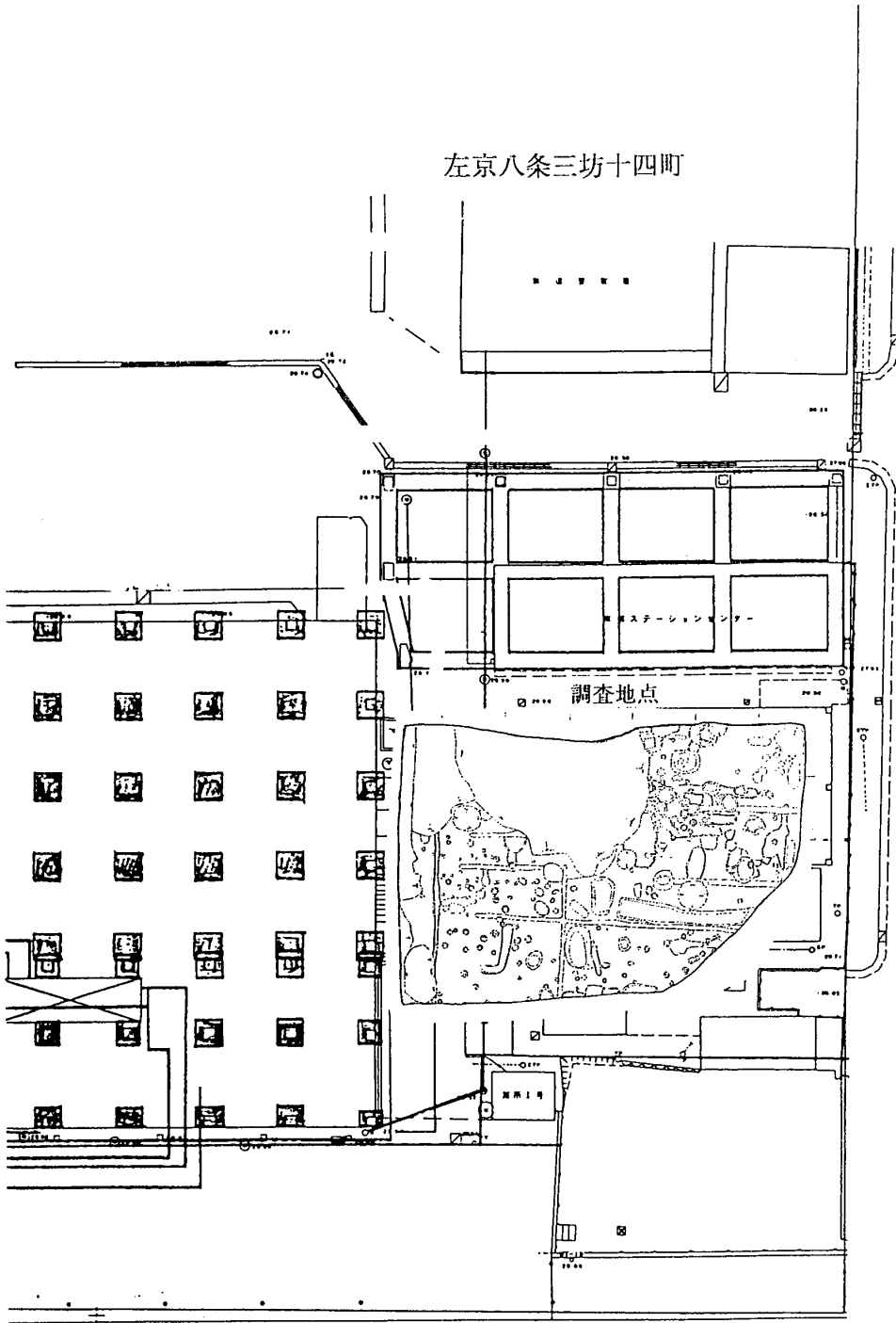
調査によって、当該地が平安時代後期以前は湿地帯であるにもかかわらず、八条院の設定に伴い、排水溝を掘り、また整地をして地盤を安定させ、遺構を形成したことが判明した。左京八条三坊十四町は東寺百合文書の「後高倉院町下文抄寫」に梅小路

北東洞院西一丁 御倉跡と書かれており、倉町であった。八条院領の解体後は東寺の所有になり、各時代の年貢散用状が残されている。元応元年（1319）の年紀のある八条院町年貢帳には、東洞院大路の西側の宅地の八条坊門から梅小路にかけて、12軒の屋敷地が記載されている。調査地点は、年貢の負担額などから割り出すと、「衛藤跡」と記載された宅地に当たる。同様に、建武5年（1338）の年貢帳では、「孫次郎」「トウ實 今又三郎」「次郎兵衛」「次郎兵衛」「セイ次郎」などの宅地、貞治元年（1362）では、「寂正」「四郎三郎」などの宅地に相当する。鎌倉時代の後期の東西溝はこの宅地割の区画溝と考えられる。

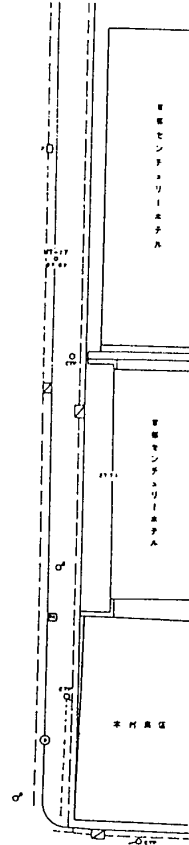
室町時代後期になると、土壌、柱穴などの遺構はなくなり、畝の耕作用の溝が検出されることから、急速に農村化した状況がうかがえる。



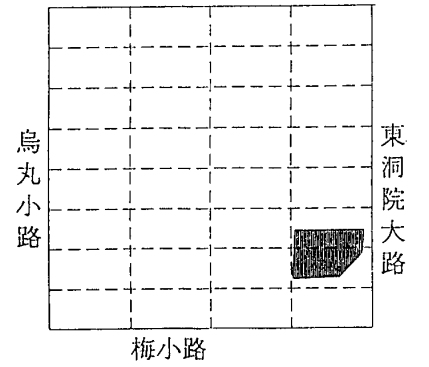
左京八条三坊十四町



東洞院大路

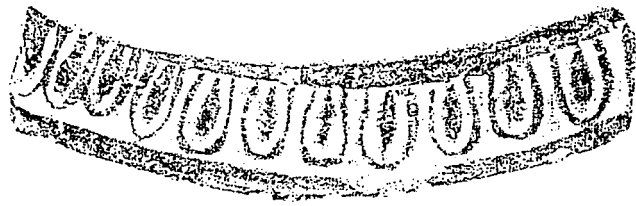
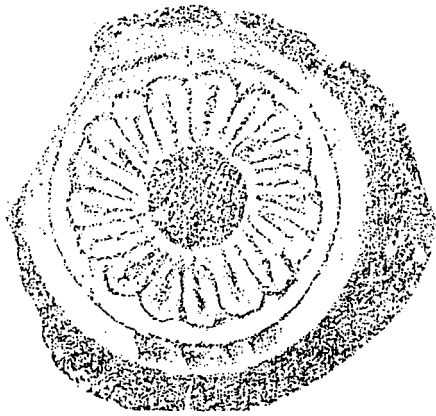


八条坊門小路



梅小路

調査地点位置図 (1 : 400)



瓦溜出土軒瓦拓影（1：2）

## 京都駅駐車場建設予定地の発掘調査現地説明会資料

1994年10月23日

(財)京都市埋蔵文化財研究所

<調査期間> 1994年6月17日～12月末日(予定)

<調査面積> 約1600㎡

### 1、調査の概要

調査地は京都駅駅舎改築に関連する調査の中では、最も西に位置することになります。調査区は東西・南北とも約40mです。

調査地は、平安時代は平安京の左京八条三坊三町にあたります。これは、北を八条坊門小路、東を町尻小路、南を梅小路、西を西洞院大路に囲まれた区画で、調査区はその中の北東部分に位置しています。

以下に、調査の順序に従って、新しいものから成果の一部を報告します。

#### 明治時代以降

調査区全体が約1.8mの厚さの盛土で覆われていました。盛土の中には石炭ガラが含まれており、七条ステーション開業後、蒸気機関車が活躍していた頃に盛土がなされたことが分かります。

盛土の最下部ではプラットホーム状の遺構を発見しています。この遺構は全部で3基あり、当時の地表面から約80cmの高さで煉瓦を積み上げて作っていました。また、煉瓦の下には直径30cmを越える太い丸太の杭が並べて打ち込んであり、地盤沈下を防いでいます。方向はいずれも現在の東海道線のほうに向っており、駅に関連する操車場のような施設があったと推定しています。

#### 戦国時代～江戸時代

この地は、鉄道が開通する直前までは田畑として利用されていたようです。西洞院通りに流れていた西洞院川に向かって緩やかに傾斜した地形に沿って、耕作に関連する細長い溝が東西・南北方向に規則正しく伸びていました。「のつぼ」も見つかっています。

田畑はかなり深くまで耕されており、室町時代や鎌倉時代の整地層にまで及んでいるところもあります。おそらく、当時の人々は農作業をしながら古い時代の土器を数多く拾ったことでしょう。

#### 室町時代

調査区北部と東部を中心として多くの柱穴が分布していることから、八条坊門小路と町尻小路に面して建物が建ち並んでいたことが分かります。しかし、柱穴はいずれ



も規模の小さい掘立柱なので、大きな屋敷ではなく、町屋であったと推定できます。

柱穴以外にも井戸・ゴミ捨て穴と考えられる土壌・区画の溝などの遺構があります。井戸の構造は、板を組み合わせたもの・底を抜いた桶を据えたもの・曲げ物を積み重ねたものなど様々で、現在確認できただけでも20基を越えています。

井戸の大部分は柱穴が集中する部分にあり、調査区北部では八条坊門小路から南へ約20m入ったところに東西方向に並びます。また、調査区東部では町尻小路から西へ約35m入ったところに南北方向に走る区画の溝を境として、東側に井戸、西側にゴミ捨て穴が分布する傾向があります。ここには建物の基礎と考えられる礎敷遺構もあります。一方、調査区南西部は遺構の数が少なく、土地の利用の仕方に大きな違いがあります。

#### 平安時代～鎌倉時代

まだ、この時代の遺構を掘り下げてはいませんが、八条三坊三町を東西に二分する南北溝や北側四分の一を区画する東西溝を確認しています。このほかにも土器をまとめて投棄した土壌や井戸があることが分かっています。

## 2、遺物の概要

室町時代の土器類が出土遺物の大部分を占めます。土師器の皿に加えて、陶器の壺・甕・鉢、さらに中国から輸入された青磁や白磁の椀・皿もあります。瓦はほとんどなく、建物が板葺いたおきや茅葺かやぶきであったことを示しています。調査地を特徴づける遺物には、鋳物の鋳型があります。中には製品の文様の細部まで分かる破片もあります。工房の跡は確認していませんが、盛んな鋳物生産が想像できます。

## 3、まとめ

最後に、調査はまだ途中ですが、わかったことをまとめておきます。

今回の調査の大きな成果は、室町時代の左京八条三坊三町の一角の土地利用の仕方を明らかにすることができたことです。八条坊門小路や町尻小路に入口を向けて町屋が並び、裏には井戸が掘られました。家々では遺物から分かった鋳物生産のほかにも種々の手工業生産が行なわれていたことでしょう。礎敷遺構は蔵の跡かもしれない。町屋の裏は溝によって区画され、その内側には空地が広がっていました。ここにはゴミが捨てられたりもしましたが、作業場として使われたこともあったかもしれません。

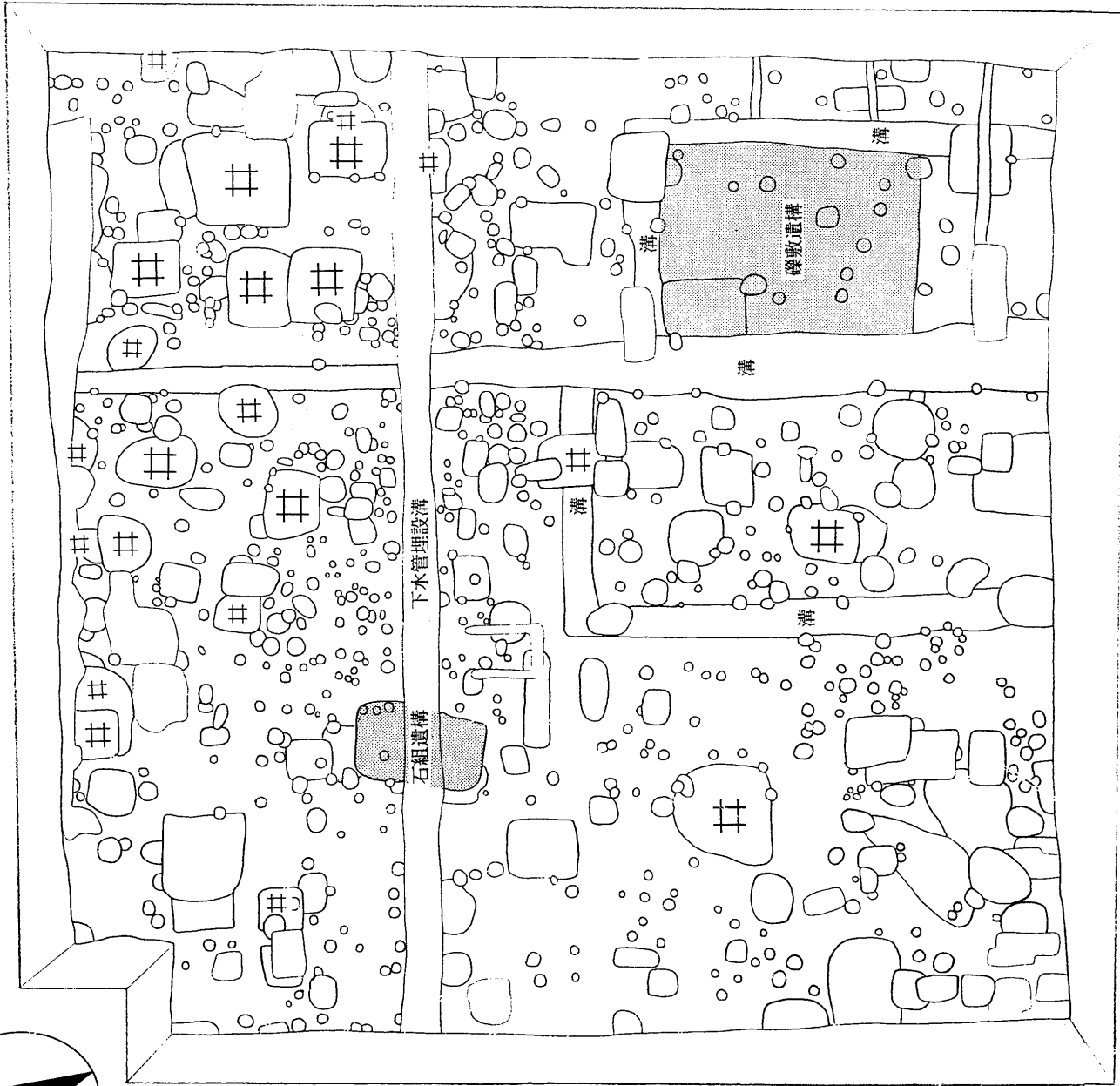
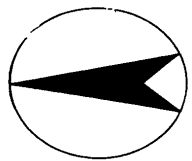
今後調査が進めば、平安時代から室町時代にかけての手工業者の町の移り変わりがさらに詳しく明らかになっていくことでしょう。

Y = -22,000

Y = -21,980

X = -112,760

X = -112,780



遺構略測図 (室町時代 1 : 200)